

薬売り

小川未明

青空文庫

どこからともなく、北ほつこく国こくに、奇きみよう妙めうな男おとこが入はいつてききました。

その男おとこは黄きいろ色いろな袋ふくろを下さげて、薬くすりを売うつて歩あるきました。夏なつの暑あつい

日ひに、この男おとこは村むらから村むらを歩あるきましたが、人ひと々びとは気き味みを悪わるがつ

て、あまくすりり薬かを買かつたものがありません。

けれど、男おとこは根こん気んきよく、日ひ盛ざかりをかさをかぶつて、黄きいろ色いろな袋ふくろを

下さげて、

「あつさあたりに、食たべあたり、いろいろな妙みよう薬やく」といつて、

呼よび歩あるきました。

子ども
子供らは、人さらいがきたといつて、この薬売りがくると怖
ろしがって逃げ隠れたりして、だれもそばには寄りつきませんで
した。

ある日のこと、太郎は独り圃に出て遊んでいました。遠くの方
で、糸車の音が聞こえてきました。海のある方の空が、青く
よく晴れ渡って雲の影すらなかつたのです。とんぼが、きゆうり
や、すいかの大きな葉の上に止まったり、棒の先に止まったりし
ているほか、だれも人影がなかつたのです。

このとき、かなたから、薬売りの声が聞こえたのであります。
毎日、毎日、こうして根気よく歩いて、あまり買う人がな
いだろうと、村の人々がいったことを太郎は胸に思い出して、

なんとなく、その薬売りが気の毒なような感じがしたのであります。

けれど、また気味悪くも思ったので、隠れようと思いましたが、そんな場所がなかったので、きゆうりの垣根の蔭に黙って立っていますと、薬売りの声はだんだん近づいてきたのであります。その細かい、さびしい途は、すぐこの圃のそばを通っていました。どうかして、薬売りの男に自分の姿が発見からなければいごと、太郎は心で気をもんでいました。

いつしか薬売りは、間近にやってきましたから、太郎は顔を見ないようになを下を向いていますと、

「坊ちゃん、坊ちゃん。」

不意に、こう呼びかけられたので、太郎は思わず身震いしました。そうしてやつと、顔を上げて、おそろおそろ薬売りのほうを見ますと、かさをかぶった薬売りは途の上に立って、じつとこちらを向いていました。

「坊ちゃん、お願いがありますが。」と、薬売りはいいました。

「なあに。」と、太郎は、お願いと聞いて返事をしました。

「のどが渴いて、しかたがありませんのですが、この辺に水はありませんでしょうか。」と、薬売りは扇子を指頭でいじりながらいいました。

「ずつと、あつちまでゆかないと井戸はありませんよ。」と、太郎は答えました。

「そうですか。私は、もうのどが渴かわいて、我慢がまんができなくなりま
した。まだ、そんなに遠方えんぽうでございますか。」といつて、薬くすり
売うりは、まだなにかいいいたそうでありました。

このとき、太郎たろうは、思おもいついて、

「おじさん、すいかをもいであげましようか。」と聞ききました。

すると、薬売くすりうりは笑顔えがおになつて、

「私わたしも、それをお願ねがいしようと思おもつたんですが、これは坊ぼっちゃん
の家うちの圃はたけですか。」と問といました。

「これは僕ぼくの家うちの圃はたけです。」と、太郎たろうは答こたえました。

「そうですか、そんなら一ついただきたいものです。」と、薬くすり
売うりはいいました。

太郎は、いちばん実のいった、水気のたくさんありそうなのを
もぎつて、薬売りの前へ持つていつて渡しました。

薬売りは、太郎のしんせつに感じて、たいへんに喜びました。

「坊ちゃん、あなたのごしんせつは忘れませんよ。ここに私は、

たいへんによくきく薬を持つています。この薬は、病気のとき

や、けがなどをして気を失ったときには、のむとすぐにきく靈

薬でございます。たくさんは持つていませんが、ここに一粒、

三粒あります。お礼にこれをさしあげておきます。」と、薬売

りはいつて、黄色な袋の中から、小さな紙包みになった丸薬

を出して、太郎に与えたのであります。

「おじさん、どうもありがとうございます。」といつて、太郎は礼を述べま

した。

「私は、そのうち船がこの港に入ったときに、それに乗ってお国を去りますよ。また、しばらくは、お目にかかりません。来年の夏も再来年の夏も、お国へはこないつもりでございます。坊ちゃんはお達者で大きくおなりなさい。」といって、薬売りは太郎の頭をなでてくれました。

やがて、この二人は別れたのであります。

二、三日たつと、この港に見慣れない一そうの黒い船が入ってきました。こんな船はめつたに見ることがないのであります。その船は沖に一日一晩泊まっていたが、あくる日は、その影も姿もなかったのであります。そうしてその日から、村に薬売

りがこなくなりました。

太郎は、薬売りのくれた丸薬を、大事にしてしまっておきました。

二

曇った日のことです。太郎は海辺にゆきますと、ちょうど波打ちぎわのところ、一羽のやや大きな鳥が落ちて、もだえていました。どうしたのだろうと思つて、近寄つてみますと、わしが血だらけになつて、翼を傷めているのであります。

太郎は、これを見ると、きつとどこかで、わしかなにものかと

戦^{たたか}つて傷^{きず}を受けてきたにちがいない、そうして、ここまで飛^とんできて、ついに気^{きりよく}力^{うしな}を失^おつて落ちたのだと思^{おも}いましたから、彼^{かれ}は、さつそく家^{うち}に駆^かけて帰^{かえ}つて、いつか薬^{くすり}売^りからもらいました丸^が薬^{んやく}を持^もつてきて、それを死^しにかかつているわしにのませてやりました。

この間^{あいだ}、絶^たえず波^{なみ}は押^おし寄^よせてきて、わしをさらつていこうとしていたのであります。しばらく、じつと太郎^{たろう}はそこに立^たつて見^み守^{まも}つていますと、わしは、しだいに体^{からだ}を動^{うご}かしはじめました。そのうちに、力^{ちから}強^{つよ}い羽^はばたきを二、三度^どつづけてしますと、生^うまれ変^かわつたように元^{げん}氣^きづいて立^たち上^あがりました。そうして、曇^{くも}つた空^{そら}に大^{おお}きく輪^わを描^{えが}いて下^{した}の荒^あらなみ波^{なみ}を見^み下^おろしながら、どこへ

ともなく飛び去つてしまつたのでありました。

太郎は、いまさら、薬売りのくれた霊薬のききめに驚きま
した。いつたいあの薬売りは、どこからきて、どこへ去つたの
だろう。彼は、見慣れない船のきたことや、その船が立つた日か
ら、薬売りの見えなくなつた、いろいろのことを思つて、しば
らくぼんやりと海の上をながめていますと、遠く、いくつとなく
船が黒い煙を上げて、いつたりきたりしています。

その夜、海がたいへんに暴れました。波が高く、風が叫びまし
た。雨戸をコトコトと鳴らしました。海辺にある太郎の家は、大
風の吹くたびに、ぐらぐらと揺るぐかと思われたのであります。
太郎は夜中に風の音を聞いて眠ることができませんでした。そ

うして、こんな日に航海する人は、どんなに難儀をしなればならぬだろうと思ひますと、薬売りのじいさんは、いまごろどうしたろうか、もはやどこかの港に着いたであろうか、それともまた遠い国へいくので、船に乗っているであろうかと、その身上などが案じられたのであります。

このとき、まくらもとの雨戸をたたくような音がしました。太郎は、きつと海の方から強く吹きつける風の音だろろうと思ひました。すると、つづいて羽ばたきする音が聞こえました。

「きつと、風のために、海鳥がねぐらを取られて騒いでいるのだらう。」と思ひました。

その羽ばたきが、あまりたびたび聞こえましたので、なんであ

ろうと、太郎は起きて、雨戸を開けて外を見ますと、空は真つ暗ほしひかりで星の光ひとつ見えずに、波が高く騒いでいました。

そのとき、不意に、一羽の鳥が窓からへやの中に飛び込みました。それは、いつか命を助けてやったわしでありました。わしは一つの袋をくわえていました。そして、畳の上ふくろに落とすと、また暗やみなかの中に飛び込んで、どこへともなく立ち去つて、姿をくらましたのであります。

太郎は、わしが落としていった袋を拾い上げてみますと、それは黄色きいろな小さな袋であつた。薬売りの持つていた大きな袋の形くすりうによく似ていました。ともすると、この袋も薬売りが持つていたのかもわかりませんでした。

ふくろあ
袋を開けてみますと、その中なかには小ちいさな遠眼鏡とおめがねが入はいつていました。これこそ、じつにどんな鳥とりの目めよりも敏さとい不思議ふしぎな眼鏡めがねであつて、まったく、わしがいつか命いのちを救すくつてもらつたお礼れいに太郎たろうに持もつてきてくれたものだどわかりました。

夜よが明あけると、風かぜは止やまりましたけれど、沖おきの上うえには黒雲くろくもが垂たれ下さがつて、ゆく船ふねの影かげが見みえませんでした。

太郎たろうは浜辺はまべに立たつて、わしのくれた遠眼鏡とおめがねで沖おきの方ほうをながめますと、ちようど、わしの瞳ひとみのようにその眼鏡めがねは、幾いく百里りも遠とおいと、うなばらとおの景色けしきが、その中なかに映うつるのであります。

その方ほうは波なみが穏おだやかで、太陽たいようが静しずかに大空おおぞらに燃もえていました。空そらは、青あおく、青あおく晴はれて、海鳥うみどりが飛とんでいるのも見みえまし

た。そうして幾いくそうかの船ふねが黒い煙くろけむりを上げて、ゆうゆうとして波なみの上うえを航こう海かいしていました。太郎たろうは、遠目鏡とおめがねで、薬売りくすりうの乗のつていった船ふねは見みえないかと、いろいろに探さがしました。

すると、いちばん遠とおくゆく船ふねがあります。つぎに、それよりやや後おくれて形かたちの変かわつた船ふねがあります。もしや、それでないかと、じつと眼鏡めがねをその船ふねの上うえに向けて子細しさいに見みますと、いつかこの港みなとに入はいつた、彼かの見慣みなれない船ふねがありました。

薬売りくすりうは、どうしたかと、太郎たろうは、なお船ふねの中なかを探さがしますと、甲板かんばんの上うえに、薬売りくすりうは、知らぬ商人あきんどとなにやら笑わらいながら、煙草たばこを喫すつて話はなしをしていました。商人あきんどは、顔かおの色いろのおそろしくくろおとこ黒い男くろおとこでありました。

そうして、箱はこの中なかから、さんごや、真珠しんじゆや、めのうや、水すいし
晶ようや、その他た、いろいろと高価こうかな、美しい宝ほう石せきを出だして、薬く
売すりりに示しめしておりました。

太郎たろうはいつまでも、その船ふねを見送みおくつていますと、船ふねはだんだん、
知らぬ遠とおい遠とおい国くにの方ほうへ小ちいさくなつていつてしまったのでありま
す。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「葉《くすり》売《う》り」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年10月01日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

薬売り

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>